

インドネシア語の情報構造に関するいくつかの事象

Some Phenomena in Relation to Information Structure in Indonesian

降幡 正志

Masashi Furihata

東京外国語大学総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Abstract

The aim of this study is to overview information structure of Indonesian through some phenomena. As an interesting analysis of information structure in Indonesian, firstly I introduce Halim's work (1974) that discussed an important role of intonation with showing topic-comment structure. Then some phenomena of Indonesian from the viewpoint of information structure are discussed. In formal Indonesian, some grammatical aspects such as *wh*-interrogative sentences, the use of passive construction, and the use of particles *-lah* and *-kah* can be explained partly with information structure. Colloquial Indonesian has various means for showing information structure. These phenomena suggest that Indonesian has a tendency to be quite conscious of topic in topic-comment structure.

キーワード：インドネシア語，情報構造，主題と題述

Keywords: Indonesian, information structure, topic and comment

はじめに

本稿は、インドネシア語の情報構造について、いくつかの事象を例示しながら概観することを目的とする¹。他の諸言語と同様、インドネシア語も伝統的に文法構造の観点による分析が多くなされてきたが、文法構造のみでは十分に説明しきれない事象も見られる。それらの解明に、しばしば情報構造の観点が有用であると考えられる。



本稿では、『情報構造調査票』（峰岸 2019）を念頭に置きつつ、インドネシア語のいくつかの事象を取り上げ、それらに対し情報構造による検討を行なう。『情報構造調査票』はタイ語を例として情報構造的観点から記述を行なっている。しかしインドネシア語はタイ語とは類型的な特徴を異にしており²、『情報構造調査票』どおりにインドネシア語の記述を進めるには困難を伴う。そのため本稿は同調査票からは離れた形でインドネシア語の情報構造について、とりわけ「主題 (topic) – 題述 (comment)」の枠組みに基づいて論じていく。

本稿の構成は、第 1 章でインドネシア語の基本文型について確認し、第 2 章ではインドネシア語の情報構造を検討する上で独特な議論を展開している Halim (1974) のイントネーション論を紹介する。さらに第 3 章では、インドネシア語のいくつかの事象をとらえ、それらにつき情報構造の観点から検討を加えていく。

I. インドネシア語の基本文型

インドネシア語では、名詞句内の語順は「被修飾語 – 修飾語」である（例：*orang Jepang* 「日本人」：*orang* 「人」、*Jepang* 「日本」）。ただし、数量を表す語は被修飾語の前に述べる（例：*tiga orang* 「3人」：*tiga* 「3」）。

文の構成要素の基本的な語順は「主語 – 述語」である。述語は、名詞や形容詞、動詞（自動詞・他動詞）、前置詞句などさまざまな要素を取りうる。他動詞文は SVO、すなわちいわゆる目的語が他動詞の後に続く。

基本的な文型について、以下に「名詞文」と「非名詞文」とに分けて説明する。

1. 名詞文

述語が名詞（句）あるいは名詞相当と見なされる語句からなる文を、ここでは便宜上「名詞文」と呼んでおく。(01) は、*orang itu* 「その（あの）人」が主語、*guru saya* 「私の先生」が述語である。コンピュータを用いなくても文が成立するのがひとつの特徴である。名詞文の否定には (02) のように *bukan* という否定語を用いる³。

(01) Orang itu guru saya.

person that teacher 1SG

「あの／その人は私の先生だ」 (Halim1974)

(02) Orang itu bukan guru saya.

person that NEG teacher 1SG

「あの／その人は私の先生ではない」

インドネシア語にもコピュラは存在し、フォーマルな文体では名詞文に対し基本的にコピュラが用いられる。(03) の *adalah* はコピュラである。

(03) Orang itu adalah guru saya.

person that COP teacher 1SG

「あの／その人は私の先生だ」

2. 非名詞文

述語の中心となる要素が動詞や形容詞、前置詞句など名詞相当句以外の句からなる文を、ここでは便宜上「非名詞文」と呼んでおく。非名詞文の特徴のひとつとして、基本として否定語に *tidak* を用いることが挙げられる。(04) では自動詞 *berangkat* 「出発する」、(06) では形容詞 *panas* 「熱い」、(08) では他動詞 *menerima* 「受け取る」がそれぞれ述語の中心要素となっている。またいずれの文も (05)、(07)、(09) に見られるように *tidak* を否定語として用いている。

(04) Dia berangkat ke Amerika kemarin.

3SG leave to America yesterday

「彼／彼女は昨日アメリカに出発した」 (Halim 1974)

(05) Dia tidak berangkat ke Amerika kemarin.

3SG NEG leave to America yesterday

「彼／彼女は昨日アメリカに出発しなかった」

(06) Kopi ini masih panas.

coffee this still hot

「このコーヒーはまだ温かい」 (Halim 1974)

- (07) Kopi ini tidak panas.
 coffee this NEG hot

「このコーヒーは温かくない」

- (08) Dia menerima hadiah dalam perlombaan ilmiah.⁴
 3SG MEN-receive prize in contest scientific

「彼／彼女は学術コンテストで受賞した」 (*Politik Antarbangsa* [一部改])

- (09) Dia tidak menerima hadiah dalam perlombaan ilmiah.
 3SG NEG MEN-receive prize in contest scientific

「彼／彼女は学術コンテストで受賞しなかった」

II. Halim (1974) のイントネーション論

インドネシア語における文の構成要素は、おおまかに文の骨組みをなす主語と述語、および随意的な要素（付加詞）とに分けられる⁵。インドネシア語では「主語－述語」の語順が無標であるが、実際には倒置、すなわち「述語－主語」の語順も多く現れる。このような事実を説明する議論のひとつとして、Halim のイントネーション論が有用である⁶。

Halim (1974) は、インドネシア語の文構造に対し、ピッチの音響分析を踏まえた上でさまざまな統語論的検討を行い、4種のピッチパターンが模式的に文法カテゴリーに関連すると論じた（表1）。各パターンに見られる数字はピッチの高さを表し3が最高、1が最低の音調で、冒頭の2はニュートラルな音高と捉える。またrは句末の上昇（*rizing*）、fは下降（*falling*）を表す。

表1：文法カテゴリーに関連するピッチパターン (Halim 1974)

焦点化された主題 (focalized topic)	233r
焦点化されない主題 (unfocalized topic)	211f
無標の題述 (unmarked comment)	231f
有標の題述 (marked comment)	232f

主題が題述に先行する場合には「焦点化された主題」と「無標の題述」の組み合わせ

となり、題述が主題に先行する場合には「有標の題述」と「焦点化されない主題」の組み合わせとなる。

名詞文は文法上の主語と情報構造上の主題が基本的に一致する。(10) は主語 *orang itu* 「あの／その人 (は)」が「焦点化された主題」、*guru saya* 「私の先生 (である)」が「無標の題述」である。

(10) = (01) Orang itu guru saya.
 2- 33r / 2- 31f #
 person that teacher 1SG

「あの／その人は私の先生だ」

一方 (11) は、*guru saya* が「有標の題述」のピッチパターンを取ることでより述語であることが示され、「焦点化されない主題」のピッチパターンを取り後続する *orang itu* がその主語として対応している。

(11) Guru saya, orang itu.
 2- 32f / 2- 11f #
 teacher 1SG person that

「私の先生だ、あの／その人は」

(12) と (13) は形容詞 *panas* 「熱い」が述語の中心要素である非名詞文であるが、それぞれ(10)、(11)と同様のピッチパターンを取っており、(12)が「主語－述語」、(13)が「述語－主語」となっていることがわかる。

(12) = (06) Kopi ini masih panas.
 2- 33r / 2- 31f #
 coffee this still hot

「このコーヒーはまだ温かい」

(13) Masih panas, kopi ini.
 2- 32f / 2- 11f #
 still hot coffee this

「まだ温かい、このコーヒーは」

(17) Dia berangkat ke Amerika kemarin.
 2- 33r/ 2- 31f #
 3SG leave to America yesterday

「彼／彼女がアメリカに出発したのは昨日だ」

(14)～(17) に見られるように、主語や述語のみならず付加詞 (*ke Amerika* 「アメリカへ」、*kemarin* 「昨日」) も主題や題述となることができ、それぞれが情報構造に関わるピッチパターンで表されうる。付加詞が「焦点化された主題」として文中に現れる例を1つだけ示しておく。(18) では、付加詞 *kemarin* 「昨日」と *di sekolah* 「学校で」が「焦点化された主題」、述語 *main bola* 「ボール遊びをする」が「無標の題述」、主語 *Doni* 「ドニ (人名)」が「焦点化されない主題」となっている。

(18) *Kemarin di sekolah main bola Doni.*
 2- 33r / 2- 33r/ 2- 32f/ 2- 11f #
 yesterday at school play ball PN

「昨日、学校でボール遊びをしたよ、ドニは」 (Halim 1974)

上述したように、Halim はピッチの音響分析および統語的な検討を基にピッチパターンを模式的に導き出したが、実際のイントネーションは必ずしもこのような一元的なパターンを取るわけではなく、さまざまな要因により多様なパターンを見せるので、イントネーションのみを根拠として「主題－題述」の認定を行なうわけにはいかない。とはいえ、ともすると軽視されがちな音声的な特徴がインドネシア語にとって情報構造を示す重要な要素であることを論じた点において、このイントネーション論は今なお注目値する。

III. 情報構造にからむインドネシア語のいくつかの事象

本章では、インドネシア語のいくつかの事象を取り上げ、情報構造との関連について論じていく。

1. 疑問詞疑問文

疑問詞を用いる疑問文では、一般に主語以外は平叙文中の要素と同じ位置で疑問詞に置き換えて述べる事が可能である。(19) の平叙文に対し、(20) では *makan* 「食べる」の対象 (いわゆる目的語) *nasi goreng* 「ナシゴレン」の代わりに疑問詞 *apa* 「何」を、(21) では *di kantin* 「食堂で」の代わりに *di mana* 「どこで」、(22) では *tadi* 「さっき」の代わりに *kapan* 「いつ」という疑問詞を同じ位置で用いて疑問文となっている。ただし、平叙文と常に同じ位置である必要は必ずしもなく、(23) のように文頭など他の位置で疑問詞を述べることも少なくない⁸。

(19) Dia makan nasi goreng di kantin tadi.
 3SG eat fried.rice at canteen a.while.ago
 「彼／彼女はさっき食堂でナシゴレンを食べた」

(20) Dia makan apa di kantin tadi?
 3SG eat what at canteen a.while.ago?
 「彼／彼女はさっき食堂で何を食べたの？」

(21) Dia makan nasi goreng di mana tadi?
 3SG eat fried.rice at where a.while.ago?
 「彼／彼女はさっきどこでナシゴレンを食べたの？」

(22) Dia makan nasi goreng di kantin kapan?
 3SG eat fried.rice at canteen when
 「彼／彼女はいつ食堂でナシゴレンを食べたの？」

(23) Kapan Dia makan nasi goreng di kantin?
 when 3SG eat fried.rice at canteen
 「いつ彼／彼女は食堂でナシゴレンを食べたの？」

一方、インドネシア語では主語の位置で疑問詞を用いることはできず、(24) は非文となる。これは、疑問詞で述べられる事柄は情報構造上の題述であるが、インドネシア語では文法構造上の主語と重なることができないという制約による。そのため (19) の述語 (および付加詞) に対しいわゆる関係代名詞 *yang* を用いて名詞相当の句とし、それ

が主語となり、疑問詞は述語の位置を占めることになる。(25) は述語として疑問詞 *siapa* 「誰」が先行している倒置文であると分析される。また(26) のように *yang* 以下の名詞相当句が主語となり、述語としての疑問詞 *siapa* が後続することも可能である。

(24) **Siapa makan nasi goreng di kantin tadi?*
 who eat fried rice at canteen a.while.ago

(25) *Siapa yang makan nasi goreng di kantin tadi?*
 who NMLZ eat fried rice at canteen a.while.ago

「誰がさっき食堂でナシゴレンを食べたの？」

(26) *Yang makan nasi goreng di kantin tadi siapa?*
 NMLZ eat fried rice at canteen a.while.ago who

「さっき食堂でナシゴレンを食べたのは誰？」

2. 動作主主語文と動作対象主語文（いわゆる能動と受動）

他動詞文における「能動－受動」といった統語的な文型の使い分けは、能動文が一義的であり、受動文はそこから派生した構文的なバリエーションの書き換えと捉えられることが多い。しかし、なぜそのようなバリエーションが存在するかというと、情報伝達のストラテジーに関わるためであると考えられる。つまり、ある事物が文脈の流れから主題として設定され、文として表現する際にその事物が主語の位置を取る。さらに動作という意味的観点から設定された主語がその動作をする立場（動作主）か動作の対象かという関係を明確にすることが、構文的なバリエーションの使い分けにつながるのである。

筆者は、こうした使い分けに関し「能動」「受動」ではなく「動作主を主語とする文」「動作対象を主語とする文」と考えている。インドネシア語では、他動詞が接頭辞 *meN-* を伴うことにより、対応する主語が動作主であるという文法的な関係を表す。一方、対応する主語が動作対象である場合の他動詞は、接頭辞を伴わない形、あるいは接頭辞 *di-* を伴う形を必要に応じて使い分ける⁹。

(27) では、文脈により *Anda* 「あなた」が主題となり、文中で主語の位置を占めるため、対応する述語内の他動詞が接頭辞 *meN-* を伴った形 (*membeli*) で用いられ、*Anda* が「買う」という動作の動作主であるという文法的関係をも表す。一方、(28) では文

脈により *baju ini* 「この服」が主題となり、文中で主語の位置を占め、対応する述語内の他動詞が接頭辞 *di-* を伴った形 (*dibeli*) で用いられることにより、「買う」という動作の対象であるという文法的関係をも表す。

- (27) *Anda dapat membeli baju ini di toko itu.*
2SG can MEN-buy wear this at shop that

「あなたはあの／その店でこの服を買える」

- (28) *Baju ini bisa dibeli di toko itu.*
wear this can DI-buy at shop that

「この服はあの／その店で買える」

3. 小辞 *-lah* と *-kah*

インドネシア語では談話機能辞 *-lah* と *-kah* が多用される。伝統的に *-lah* は「強調」を示すと説明されているが、場合によっては「口調を和らげる」用法もあるという説明が付け加わることもある。一方 *-kah* は「疑問」を示す働きを持つと説明される。しかし統語的な観点からは、個別の用法の説明はなされるものの、これらの機能辞が付される要素に全体的にどのような特徴があるのか、あるいはこれらの機能辞の統語的な特徴はどのようなものかといった説明はさほど多くなされていない。Cole, et al. (2005) は、*-lah* を *focus marker*, *-kah* を *interrogative focus marker* と述べている。一方 Furihata (2016) は *-lah* を「題述および／または焦点マーカー (*comment and/or focus marker*)」とし、*-kah* は疑問の意味を伴いつつ *-lah* と同様な統語的位置を占めると論じた。

(29) は命令文である。*-lah* の使用は随意的で、用いられる場合も用いられない場合もある。命令文は基本的に述語で言い始めるが、述語は題述と重なりやすいため *-lah* と結びつきやすいと考えられる。

- (29) *Berangkat(-lah) sekarang.*
leave(-LAH) now

「今から出発しなさい」 (Sneddon et al. 2010)

(30) は「述語－主語」の倒置文である。これも随意的ではあるが、*-lah* を伴うことにより *itu* 「それ／あれ (である)」が述語であることがより明確になる。しかし *-lah* を

伴う要素は述語に限らず、(31) の「その年以來」という付加詞にも *-lah* を付すことができる。この文は「その年以來である、インドネシアがオランダの植民地になったのは」といったように、*sejak tahun itu* 「その年以來」が情報構造上の題述であると考えられる。

- (30) Itu(-lah) jalan yang terbaik.
that(-LAH) way NMLZ best

「それが最良の方法だ」

- (31) Sejak tahun itu(-lah) Indonesia menjadi jajahan Belanda.
since year that(-LAH) Indonesia become colony Netherlands

「その年以來、インドネシアはオランダの植民地になった」(Sneddon et al. 2010)

また *-lah* を伴う要素は、題述全体ではなくその一部であることも少なくない。(32) では題述は *cukup baik* 「かなりよい」であるが、その中の *cukup* 「かなり」に対して焦点マーカ―として *-lah* が付されている。これは、題述の中の *cukup* に焦点を当てていると考えられる。

- (32) Hubungan AS-Jepang cukup(-lah) baik.
relation USA-Japan quite(-LAH) good

「アメリカー日本間の関係はかなりよい」(Furihata 2016a)

さらには、主語が *-lah* を伴うことも若干であるが見受けられる。(33) では主語にあたる *dia* 「彼／彼女／その人」に *-lah* が付されている。このような例が見られるということは、*-lah* が題述マーカ―であるとは簡単には言えないことを意味する。おそらくは、「主題－題述」の枠組みとは異なるレベルで「焦点」を示しているのではないかと思われる。

- (33) Siapa menang, dialah modern.
who(ever) win 3SG-LAH modern

「勝ち取った人がいたら、その人が現代的なのだ」(KOMPAS 2004/06/25)

機能辞 *-kah* については1例のみ挙げておく。(34) では *di mana* 「どこで」という疑問詞に *-kah* が付されている。疑問文の中では疑問詞が題述となることを考えると、*-kah*

と結びつきやすいことは納得しやすいであろう。

- (34) Di manakah mereka bertempat tinggal?
at where-KAH 3PL reside

「どこに彼らは住んでいるのか？」

4. いわゆる二重主語文

いわゆる二重主語文とは日本語の「象は鼻が長い」に相当する構文である。インドネシア語ではスタンダードな文型とは言い難いが、実際によく使われている。(35) はその1例である。*sopir itu* 「その運転手 (は)」と *namanya Pak Ali* 「名前がアリ氏 (である)」とがひとつの枠組みをなし、さらにその内部で *namanya* 「その／彼の名前 (が)」と *Pak Ali* 「アリ氏 (である)」が枠組みをなしている。インドネシア語では、「その…… (が)」を構成する要素に接語 *-nya* を用いる。

- (35) Sopir itu namanya Pak Ali.
driver that name=DET TTL PN

「その運転手は名前がアリ氏である」(Sneddon, et al. 2010)

このような文型を、Sneddon, et al. (2010) は Possessor topic-comment clauses と呼び、*sopir itu* に相当する部分を *topic* 「主題」、*namanya* が「主語」、そして *Pak Ali* が「述語」と説明している。*namanya Pak Ali* を主題に対する題述と捉えているが、主語 (*namanya*) と述語 (*Pak Ali*) という枠組みが文法構造として重要であり、また主題を主語や述語と同じレベルの要素と見なしていると考えているようである。

しかしその一方で、主題に対する関係節化が可能であるとして、(36) を例として挙げている。

- (36) sopir yang namanya Ali
driver NMLZ name= DET PN

「名前がアリであるその運転手」(Sneddon, et al. 2010)

関係節化は、関係詞 *yang* の左に現れる要素が主語、右の要素が述語であるという関係がなりたつ。このことは、Sneddon, et al. が「主題」としている要素が実際には文法

構造的には「主語」であることを示唆するものである。

5. *ada* 存在文

存在や所在を表す動詞として *ada* 「ある、いる」がよく用いられる。「(……に) ～～がある／いる」という存在を表すには、存在する事物が *ada* の後に続く。Sneddon, et al. (2010) は、この用法を “Presentational *ada*” と呼んでいる。(37) と (38) はその例で、このうち (38) は *di Indonesia* 「インドネシアに」という前置詞句(付加詞)が文頭に現れ、Halim のいう「焦点化された主題」の役割を担っている。

- (37) Ada orang di kantor.
exist person at office

「オフィスに人がいる」(Sneddon, et al. 2010)

- (38) Di Indonesia, tidak ada kanguru.
at Indonesia NEG exist kangaroo

「インドネシアにはカンガルーはいない」(Sneddon, et al. 2010)

存在する事物を *ada* より前に述べると、その事物と *ada* との間に句の区切れが挟まり「(～～は) ……にある／いる」のようにその事物の所在を述べることになる。Sneddon, et al. (2010) は、この用法を “Locational *ada*” と呼んでいる。(39) がその例であるが、*ada* を用いず前置詞 *di* 「～で」を伴う句だけで所在を示す述語となることがしばしばある。

- (39) Ayah tidak (ada) di kantor.
father NEG exist at office

「お父さんはオフィスにいない」(Sneddon, et al. 2010)

口語体では、(40) のように *ada* の前後にそれぞれ項が現れる文型が見られる。

- (40) Saya tidak ada uang kecil.
1SG NEG exist money small

「私は小銭がない」(Sneddon et al. 2010)

このような文はしばしば「所有」を表すとされ、Sneddon, et al. (2010) も“Possesive *ada*”と呼んでいる。確かに「小銭を持っている（持っていない）」ことを述べるという点で状況としては「所有している（していない）」ことなり、意味的に *ada* は *punya / mempunyai / memiliki* 「持っている／所有する」と置き換えることは可能であるが、筆者としては *ada* を用いるからにはあくまでも「存在」を表すということがベースとしてあり、これを「所有」と説明することに疑問を感じている。

6. 構成要素の不在

口語体においては、省略、すなわち構成要素が不在となっている発話が少なからず現れる。特に主語を省略するケースが多い¹⁰。(41) は主語を省略している例である。

(41) Sudah makan?
already eat

「もう食べた？」

(41) で省略されている要素は文法的には主語であるが、情報構造上では主題である。文脈やその場の状況などから明示的に述べなくても誰が食べたのかが話し手と聞き手の双方が認識できる。インドネシア語では、主題を明示したり、明示しなくてもなにが主題であるかの意識が強く、省略しても文脈などから何のことについて述べているのか推測できると考えられる。

二重主語文でも同様の省略がよく行なわれる (42) 。

(42) Tinggalnya di mana?
stay=DET at where

「住んでいるのはどこ？」

(43) は、他動詞「手伝う」に接頭辞 *di-* が付されているため、対応する主語は動作対象であると想定される。自身（動作主）を主語とした「手伝う」(*membantu*) ではなく、動作対象を念頭に置いているこのような表現は丁寧な言い方であるとされ、待遇表現の観点からも興味深いところである。

(43) Bisa dibantu?

can DI-help

「お手伝い致しましょうか？」

7. ウナギ文

情報構造に関連する文としていわゆる「ウナギ文」がよく挙げられるが¹¹、インドネシア語でも口語体ではしばしば用いられる。(44) をその例として挙げておく。

(44) Saya, kopi.

1SG coffee

「私はコーヒーだ」(降幡 2016)

8. 口語体における条件接続詞 *kalau*

条件接続詞の 1 つである *kalau* は、条件節を導く以外にも、とりわけ口語体において興味深い用法がある。*kalau* が節ではなく語(句)に先行し、「～に関しては、～というのは」といった意図を表す、つまり *kalau* が後続する語(句)を主題であると明示するのである¹²。文脈などによっては、他者との明確な比較・対照 (contrastiveness) を意図することにもなる。(45) ~ (48) は主題を表す *kalau* (*kalo*¹³) の用法であり、このうち (46) や (48) は他者との比較・対照が(ある程度)明確に感じられると言えよう。

(45) Kalau Jalan Sudirman, di sebelah mana?

if road Sudirman at side which

「スディルマン通り(というのは)、どちら側ですか？」

(46) Kalau aku, tidak apa-apa.

if 1SG NEG RDP.what

「僕は構わないよ」

(47) Kalo elu sukanya cewek yang kayak gimana?

if 2SG like=DET girl NMLZ like how

「おまえは、好みはどんな女なんだ？」(Sneddon 2006)

(48) Kalo menurut gue, dari awal dia nggak tulus.
if according.to 1SG from start 3SG NEG honest

「僕が思うには、はじめからあいつは誠実ではなかった」(Sneddon 2006)

(49) は、Sneddon (2006) が “shift of attention” (*How about....*) と説明しているが、これは「言いさし表現」と考えられよう¹⁴。

(49) Kalo anggrek?
if orchid

「蘭は／蘭だったら？」(Sneddon 2006)

9. 談話小辞

口語体では談話小辞 (*discourse particle*) が多用される。さまざまな種類の談話小辞が見られるが、本稿では2つのみを取り上げる。

(53) と (54) には談話小辞 *sih* が用いられている。(50) では、*sih* が付されている *tau dari mana* 「どこから (知った)」は題述であり、断言をし切れない、あるいは不確定な意図を表す際によく用いられる。一方、(51) では *gua* 「僕」に *sih* が付されているが、これは主題であり、*sih* を用いることにより他者との対比が意図される。

(50) Tau dari mana, sih?
know from where DP

「どこから聞いたんだ？」(Sneddon 2006)

(51) Ah, gua sih minum orange juice, ice cappuccino.
EXC 1SG DP drink

「あ、僕はオレンジジュースとアイスカプチーノを飲むよ」(Sneddon 2006)

(52) に用いられている *mah* はスダ語の談話小辞であるが、インドネシア語の口語体にもしばしば用いられる (Furihata 2016b)。談話小辞 *mah* は主題でありかつ他者との対比を明示するマーカーとして機能する。

(52) Bikin jadwal mah gampang.
make schedule DP easy

「予定表を作るのは簡単だ」(Sneddon 2006)

談話小辞 *sih* は主題と題述のいずれにも用いられるため、「主題－題述」の枠組みとは異なる観点による検討が必要となる。おそらくは、*sih* は「焦点化」の機能を持つのではないかと考えられる。

インドネシア語の口語体に対比の意図を持つ *sih* がすでに存在するにもかかわらず、スンダ語の *mah* も取り入られている点も興味深い。主題に対し付される *sih* と *mah* にどのような違いがあるのか、今後検討する必要がある。また、他の種々の談話小辞についても、意味的な側面から説明がなされることが多いが、情報構造からのアプローチによる分析も検討すべきであると思われる。

おわりに

本稿では、情報構造、とりわけ「主題－題述」の枠組みに関わるインドネシア語のいくつかの事象を取り上げ概観してきた。疑問詞疑問文やいわゆる能動・受動の使い分け、小辞 *-lah* や *-kah* の使用などは標準的なインドネシア語に頻繁に現れるが、何を主題とし、それが主語となった場合にどのような文法のしくみを用いるかといった観点から説明することができる。一方で、口語体においては二重主語文や「所有」を表すとされる *ada* 存在文などは主語と主題、すなわち文法構造と情報構造との関係を検討する上で興味深く、また条件接続詞 *kalau* や談話小辞などが情報構造を示す要素として多用されることも注目に値するであろう。さらに、ともすると軽視されがちな音声面についても、イントネーションが情報構造上大きな役割を果たしているという Halim の論はさらに議論を深めるべきであると思われる。

「主題－題述」の枠組みは、文あるいは発話における各構成要素の关系的な側面を述べるものである。網羅的ではないものの、本稿で扱った事象からインドネシア語は「主題」を（明示的か否かを問わず）かなりの程度意識するという情報構造上の特徴を持つことが伺える。一方で情報構造の分析においては「焦点」や「焦点化」という概念も用いられる。本稿でも何度か「焦点」や「焦点化」について述べているものの、それが何であるのか、「主題－題述」の枠組みとどのような関係にあるのかについては論じてこなかった。インドネシア語においてこれらがどのような役割を果たすのか、今後の課題としたい。

略語一覧

1	1st person	NEG	negative
2	2nd person	NMLZ	nominalizer
3	3rd person	PL	plural
CLF	classifier	PN	proper noun
COP	copula	RDP	reduplication
DET	determiner	SG	singular
DP	discourse particle	TTL	title
EXC	exclamation		
MEN-	prefix <i>meN-</i> (agent-oriented marker)		
DI-	prefix <i>di-</i> (patient-oriented marker)		
Ø-	no voice marker		
-LAH	particle <i>-lah</i>		
-KAH	particle <i>-kah</i>		

注

- ¹ 本稿は『言語の類型的特徴をとらえる対照研究会』第13回研究発表会（2020年8月1～2日：オンライン開催）で「インドネシア語の情報構造」と題して発表した内容に加筆・修正を施したものである。
- ² 「東南アジア諸言語では、大まかにいって、大陸部の『声調・孤立語・語順固定』タイプと、島嶼部の『非声調・膠着語？・語順自由』タイプとに二分されようが、このような類型的特徴が、『際立たせ、焦点化、主題化』などの情報構造の表現において何を表現手段とするか、その可能性について、それぞれの言語の調査に先立って検討しておくべきである」（峰岸 2019:1-2）。
- ³ ただし *bukan* は実際には品詞のレベルで名詞を否定するというわけでない。柴田 (2002:25) は「相手の考えていることを否定する『～ではありません』を意味します」と説明している。また Kroeger (2014) は *bukan* について “metalinguistic negation” に用いられると論じている。
- ⁴ 他動詞 *menerima* は基語 *terima* に接頭辞 *meN-* を付した語構成となっている。本稿では他動詞が *meN-* を伴う場合にはグロスに MEN- と表示する。他動詞文については III 章 2 節を参照。
- ⁵ いわゆる他動詞の目的語や自動詞の補語は、ここでは便宜上上述語に含まれる要素であると考え考慮から外しておく。
- ⁶ 筆者はインドネシア語のイントネーションについて言及する際に Halim (1974) のイ

-
- ントネーション論を参照してきた(降幡 2005、2014、2016; Furihata 2006、2016b、2018 等)。また崎山(1990)も Halim のイントネーション論を基にしている。
- ⁷ (15) はさらに *kemarin* が「焦点化されない主題」として続くため、題述のピッチパターンが 1 のレベルまで下がっていない。
- ⁸ 筆者のこれまでの経験では、*kapan* は文頭で述べられることが多いように感じられる。疑問詞が平叙文と同様の位置で用いられるか、文頭で用いられるかといった違いの傾向については、今後の課題としたい。
- ⁹ 本稿では、これらの文型の詳細には立ち入らない。
- ¹⁰ 主語以外にも、述語を省略する言いさし表現もある。また主語や述語を述べず付加詞のみで情報を伝えることも多い。
- ¹¹ 「ウナギ文」については、その研究史を含め加藤 (2004) が参考となるであろう。
- ¹² Sneddon (2006) はこのような用法を “as for x (this is what happens)” と説明している。
- ¹³ *kalau* は口語体ではしばしば *kalo* となる。
- ¹⁴ ただし、言いさし表現に常に *kalau / kalo* が必要なわけではない。

参考文献

- Alwi, Hasan, et al. 1998. *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. 3rd edition. Jakarta: Balai Pustaka.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon and Yassir Nasanius Tjung. 2005. “How Irregular is WH in Situ in Indonesian?” *Studies in Language*, 29:3. pp.553-581.
- 降幡正志. 2005. 「インドネシア語 ada 存在文のイントネーションに関する一考察」, 『東京外大東南アジア学』第 10 巻. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室. pp.32-51.
- 降幡正志. 2014. 「インドネシア語名詞文の超分節特性に関する考察」, 『東京外大東南アジア学』第 19 巻. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室. pp.86-101.
- 降幡正志. 2016. 「インドネシア語の情報構造と名詞述語文」, 『語学研究所論集』第 21 号. 東京外国語大学語学研究所. pp.191-204.
- FURIHATA, Masashi. 2006. “An Acoustic Study on Intonation of Nominal Sentences in Indonesian”, in Kawaguchi, Y., Ivan Fonagy and Tsunekazu Moriguchi (eds.), *Prosody and Syntax -- Cross-linguistic Perspectives -- (Usage-Based Linguistic Informatics 3)*. Amsterdam: John Benjamins. pp.303-325.

- FURIHATA, Masashi. 2016a. “On the Syntactic Function of Particles *-lah* and *-kah* in Indonesian Based on a Descriptive Analysis”, in *Buku Kumpulan Makalah Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia (KIMLI) 2016*. Denpasar: Masyarakat Linguistik Indonesia & Universitas Udayana. pp.257-259.
- FURIHATA, Masashi. 2016b. “Why Is the Sundanese Particle *mah* Used in Spoken Indonesian? : The Importance of Information Structure”, in *Proceeding Maranatha International Conference on Language, Literature, and Culture*. Bandung: Fakultas Sastra Universitas Kristen Maranatha. pp.7-25.
- FURIHATA, Masashi. 2018. “Partikel ‘wa’ dalam Bahasa Jepang dari Segi Studi Kontrastif dengan Bahasa Indonesia dan Bahasa Sunda”, *Simposium Peringatan 60 Tahun Hubungan Diplomatik Indonesia-Jepang: “Peran Akademisi dalam Peningkatan Interaksi Budaya”*. Universitas Indonesia, Depok, Indonesia. 4 September 2018.
- Halim, Amran. 1974. *Intonation in Relation to Syntax in Bahasa Indonesia*. Jakarta: Djambatan.
- 加藤重広. 2004. 「僕はウナギだ」(「名文でたどる日本語主語論の歴史(2)」). 『言語』33 巻2号. 大修館書店. pp.60-61.
- Kroeger, Paul. 2014. “External Negation in Malay/Indonesian.” *Language*, 90-1. 137-184.
- Li, C.N. and S.A. Thompson. 1976. “Subject and Topic: A New Typology of Language”, in C.N. Li (ed.) 1976. *Subject and Topic*. New York: Academic Press. pp.457-489.
- 峰岸真琴. 2019. 『情報構造調査票 Ver.1』. (未発表内部資料)
- 崎山理. 1990. 「日本語とインドネシア語のアクセントとイントネーション」, 杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育』第3巻: 日本語の音声・音韻(下). 明治書院. pp.288-302.
- 柴田紀男. 2002. 『CDエクスプレス インドネシア語』. 白水社.
- Sneddon, J. N. 2006. *Colloquial Jakartan Indonesian*. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- Sneddon, J. N., et al. 2010. *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. 2nd edition. London: Routledge.

謝辞

本稿は科学研究費（基盤研究(B)）課題番号 17H02331「形態統語論と音声学からみた東南アジア諸語における情報構造の類型論」の助成を受けたものである。